

筆山

第17号 / 1993・12

土佐中・高同窓会 関東支部会報 編集人/藤宗 俊一(42回)

〒106 東京都港区西麻布1-8-19-3F 六本木司法書士合同事務所気付 ☎03-3470-1055/FAX03-3470-1425



長い間、本当にありがとうございました。(2、3面に掲載)

写真提供:スポーツニッポン社

三根校長のめざしたもの

この一、二年でディック・ミネ氏、岩谷清水氏と続けて亡くなられ、残念でならない事がある。土佐中初代校長の三根円次郎先生の評伝出版が途切れ、最後の事情説明も困難になったのだ。むろん昭和10年3月18日、校長住宅で脳溢血で死亡、享年63歳であったことは明らかだ。問題は前日の事件とその背景である。

十年ほど前、関東同窓会に出席したディック氏は、葬儀の際に聞いた話として、「父は死の前日、配属将校に軍隊式の挙手敬礼の採用を強要され、激論となった。その心労で発作を起こした」と語ってくれた。後日、本紙第9号でもこのことを述べている。

三根校長の生徒の個性と自主性を尊重した「個人別指導」「自学自習」「自治会」、さらに「英国人による英語教育」「対外試合より全員参加の校内体育」など、リベラルで先駆的な教育方針が、強まる軍国色の中で、詰込主義——青瓢箪育成と誤解されたのだ。

三根校長の目指した教育を岩谷氏に探ってもらっていたのだが……。

私はこの夏をもちまして、身に着けるたびに誇りに思い、幸せを感じてまいりました、『純白のユニフォーム』を脱がせていただきました。

監督生活はちょうど三十年。この春のセンバツで母校の甲子園出場も区切りの十回となりました。教職停年にはまだ若干ございますが、来春には還暦を迎えます。この辺りで「愛する野球部に若い血を注ぎ、さらなる飛躍を」と願ったためです。後事は長年私を支えてくれた楠目博之君（51回生）に託しました。長い間皆様から賜りましたご指導とご支援・ご声援に對しまして心からお礼を申し上げます。

三十年を振り返りますと、甲子園には七回の出場で、準優勝どまりの平凡な記録に終りましたが、高校野球の理想文武両道の土佐高野球を追い求め、貫き通すことができ、幸せでした。

『全力疾走』は、単に走るということだけでなく、野球と勉強はもちろん、すべての物事にひたむきに取り組もうという姿勢であり、集中心や粘りもそうした頑張りの中で培われたと思います。『純白のユニフォーム』にも格別の

思いをかけてまいりました。勝者を讃え、敗者の気持ちを思いやる純白の心を持ち続けたいと願ったからであります。

私と選手達の三十年間は、部員不足との戦いだったといえます。私の監督就任は昭和38年9月でした。いきなりその秋の県、四国大会に優勝して、翌春のセンバツでベスト4に入り、41年センバツでは準優勝するなど、就任前半はまずまずの成績を残せたと思います。しかし当時から部員不足は慢性的でしたし、加えて金属バットの登場で力づくの野球となり、すっかりこれに打ちのめされてしまいました。

中でも昭和60年を挟む五年間は、どん底にあえぎました。平均部員数は秋が十人、夏でも十六人でした。一、二回戦での敗退が続き、私は正直なところ「土佐の時代は終わったか」「俺は引き時を誤った」と思いました。

ひとつの転機が昭和60年の1月でした。ふがいなさに業をにやしたのでしょうか。三五〇人もの卒業生が東京で「野球部復活を願って」と激励会を催してくれました。復活の見通しが全くつかない私は、

重い足で上京しました。ところが、会場のサンケイホールはあふれる熱気で一杯でした。卒業生の野球部復活への熱い思いに感激した私は「今一度、命がけでやるぞ」と決意を固めて帰高しました。



私はこの年を復活元年としました。しかし、肝心の部員が一向に整いません。その春の新入部員が五名、来年こそはと願った翌年は更に減って三名、その翌年も五名といった具合で、61・62年の秋は九

名を割り、他の運動部から選手を借りて大会に出場するといった状態でした。困り果てた私は、先祖から信仰している石鎚山登拝を始めました。膝の悪い私には耐えがたい難業でしたが、この苦しさこそが復活への道と信じ、部員を授けたい一心で一步一步登りました。

石の上にも三年と申します。63年春には十二名の新入部員を頂きました。この時の喜びは、地獄で仏の思いでした。

そしてこの秋には、早速四国大会に出場出来ました。一年生主力の若いチームはセンバツ出場は果たせませんでした。が、翌年夏に四名の三年生部員が引く張って、実に十四年ぶりの甲子園を勝ち取る事が出来ました。その後の新入部員は三名、七名でしたが、平成3年には、私が辞任を覚悟していた平成5年に合わせるように、現三年生の十七名が入部しました。これがこの春のセンバツにつながったこととはご承知の通りです。部員達の努力はもちろんですが、天の恵みと皆様の激励により、あの絶望の淵からやつとはい上ることができたように思います。

引越しを機会に資料を整理していますと、低迷の時代に少ない部員達が必死になって頑張ってくれた姿が目につく、目頭が熱くなります。そんな中で育ち、巣立つていった二〇一名の部員一人ひとりが、かけがえのない私の財産であり、宝物です。その大切さを思えば、私のこれからの生き方も、彼らが土佐高出身であることをいつまでも誇れることを第一に考えなければと、心を新たにしています。

最後に、この三十年間、何よりもうれしくありがたかったことは、どんなに弱い時でも、どの学校よりも多くの先生がたや生徒、卒業生の応援をいただいたことです。「本当に土佐での三十年でよかった」と、母校監督を務めさせていただいた幸せを、今しみじみとかみしめています。私は満ち足りた気持ちで『右文寮』を去りました。

長い間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

平成五年十月

高知市北竹島町

三六六一〇

土佐高校野球部前監督

籠尾 良雄



籠尾良雄先生の

監督ご勇退によせて

土佐高校野球部監督

楠目 博之(51回生)

昭和五十六年一月以来、籠尾先生の下で土佐高校野球部のお手伝いをさせて頂いたとき、私自身も公私にわたりご指導賜り、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は先生から、人間逆境の時にこそ強い信念と忍耐力をもち物事に対処することの大切さを教えて頂きました。ご承知の通り野球部は慢性的な部員不足に悩み、他の運動部から選手をお借りして大会に臨んだこともありましたが、しかし、そうした中でも先生は

「野球部復活」という強固な信念のもと、野球部OB諸先輩による「復活講話」の開催や、毎年練習に対して新しい発想とトレーニングを取り入れるなど、ありとあらゆる手段を講じられました。そうしたご努力が平成元年の夏、更には今春の甲子園出場という形で結実しました。

また先生のご指導は人間教育そのものでもありました。先生は常々「野球も人間のやること。その人間が立派でないと、決して活躍できるものではない」とおっしゃっておられました。そのため生徒達には「野球部員としてはもちろん、土佐高生として立派であれ」と、グラウンドあるいは寮生活を通じて誠心誠意指導されておられました。

そうした籠尾先生の指導される姿を近くで拝見し勉強させていただいた事が、私にとって何物にもかえがたい財産となりました。そしてこの上は、先生から頂戴しました『右文尚武の理想 ひたぶる全力疾走 純白の土佐』とわに輝けの言葉を胸に、土佐高校野球部のさらなる発展のため、鋭意努力してまいります。

『風』とともに

二百二人目の部員
共同通信社運動部

万代 隆

自室の戸棚の一番よく見える位置に「土佐」と書き込まれた白球を飾ってある。少し泥で汚れている。それを眺めていると、その白い球がいろんなことを語りかけてくる。つい、ウン、ウンとうなづいてしまう。

追憶というにはまだ生々しくて、籠尾先生とのひとこま、ひとこまが鮮明にふみがえってくる。確かな出合いは昭和四一年(第38回大会)の選抜決勝戦のことだった。まだ駆け出し記者の私は「土佐の野球を書くんだ」と張り切っていた。三塁側のベンチで先生の取材をしていたが、気が付くとブレイボール直前。大観衆の見守るグラウンドを、それこそ全力疾走で記者席に戻った。

中京商に惜敗した試合後は、もう仕事にならなかった。「先生にメダルを」という福岡さんの声は聞いたが、後は選手と一緒に泣くばかり。無念さと感動がごっちゃになって押し寄せてきた。原稿を書くど

ころではなく「早く仕上げる」とデスクに怒鳴られ、また泣いた、あれ以来泣き虫になったのは土佐高のせいである。

私をこんなに混乱させた土佐高の籠尾先生の野球とは一体何なのだろう。そんな自問自答が長く続いた。あれから二十七年。先生と二百一人部員の皆さんが教えてくれた答えは「風を持つている」ことだった。苦労が生んだ、誰をも

純白にさせる風だった。

今日も「土佐」の白球を見ている。監督を勇退されても先生の全力疾走は終わらずともないし、喜代夫人の伴走も続くだろう。それなら私も、二百二人目の部員だと勝手に決めて、後方からゆつくり走らせてもらおう。

(籠尾良雄先生をたたえる会によせて)

これに应えて籠尾先生は、「労苦を共にしてくれた201名の部員一人一人が私の宝であり、応援して下さいました沢山の方々が私の支えであった」と語られ満場の拍手を受けた。

全力疾走二十年

会には四時間にもおよび、酒を酌み交わす人の輪が入り乱れる中、先生は壇をおりて会場を回られ、出席者一人一人に親しく声をかけられ歓談し、請われて記念写真におさまられた。最後は、壇上でバトンタッチした楠目新監督に先導され、たくさんの教え子達に胴上げされて退場された。(F)

籠尾良雄先生をたたえる会

10月16日、高知市の城西館で一番広い「太陽の間」に於て『籠尾良雄先生をたたえる会』が催され、野球部OB、高校野球関係者、ファンを含め、約450名が集まった。教え子を代表して、萩野(44)、市川(53)両氏が挨拶にたち、上岡(42)氏が花束をご夫妻に贈り、先生の30年の功績を讃えた。また、関東支部からは、浅井副会長、窪田副幹事長、鶴和事務局長、藤宗編集長が駆けつけ、支部有志からの花束と記念品を贈呈し、関東支部への長年のご厚意に感謝の気持ちを表わした。

同学社から

事務局が移ります。

去る、9月18日、ホテル・エース高輪で行なわれた学年幹事会において、執行部提出の『同窓会関東支部事務局移転』案が承認された。同学社の近藤久寿治先輩（6回生）が引き受けられて以来およそ半世紀続いた事務局は、平成五年より41回生の鶴和・横原両氏の六本木司法書士合同事務所で新たな出発をすることになった。

編集部では、これまで同窓会活動に携わってきた裏方さんの苦労話など、ざつとばらんに語ってもらった。

◇

司会 私達は事務局といえは近藤さん、近藤さんといえは同窓会と連想するほど、近藤先輩にはお世話になってきました。このたびその事務局が移転するのは正直言って淋しい気持ちがありますが、これも時代の流れ、いつまでも近藤さんに甘えてはいられないことも事実でしょう。

A 五十年も同窓会の世話をすると、そりやあ持ち出しだけでも相当なものですよ。近藤さんは嫌な顔ひとつ見せず、やってこられた。本当に頭が下がりますね。

B そのあたりの関東支部の草創の頃は筆山の3号に詳しく載っていますが、戦後の物資不足のときから随分と学生の面倒を見られたものだと思います。

◇

C その頃は学生幹事が中心で、総会出席者も少ない時代だったと聞いてますけど、今では会員数三千人という大所帯。今の学年幹事体勢ができて同窓会も組織的に動けるようになりまして。野球部の復活を祈つてということ、サウナキーホールで三五〇名というこれまでにない最高の出席者を記録した最初のスタートは今でも印象に残ってます。

B あの時幹事の皆さんがよく頑張ってくれました。私も初代の幹事長として嬉しかったです。

D 僕なんかは広告の仕事の関係で当時出版社を担当していましたが、同窓会という看板をみて、どこか記憶があったものでふらふらと入ったのが運のつき。いつの間にか

幹事にさせられていました。E それは僕も同じ。幹事として名前だけでも連ねてくれといわれて、なんといまでは大出世で幹事長ですよ。

B どこかの政党の幹事長とちがつてお金にはまったくならない。（笑い）

C 金にはならんどころか、打ち合わせや何やらで小遣いが十数万飲み代に消えて女房といつも喧嘩やっただですよ。

D 宛名のシールも手書きでしたから住所変更の度に事務局は書き直しが大変だったろうとおもいますよ。一度封筒のシールはりから袋詰め、封

まで手伝いましたが大変なもんだと知りました。

E シールをコンピュータで打ち出すことができるようになったのは省力化、あるいは名簿の作成などのため画期的なことですね。名簿チームの小島さんや大石さんたちの努力に感謝しましょう。

B 筆山の発行も支部活動の柱です。初代編集長の小松さんは激務の中でよくやってくれました。二代目の戸田さん、今の藤宗さんと順調に発行されてうれしい限りです。

A 活動が益々活発になればなるだけ、事務局の仕事は増える。事務局という専従の職員でもいて、専従の部屋でもありそうに思っている人が結構多い。それが問題ですよ。もつと事務局の苦勞を皆に知らせる必要がある。

うけど、それにしても先立つものがある。当面とにかく事務局維持のための募金でも始めるしかないでしょうね。

司会 これまで近藤先輩の厚意に甘えてきた同窓会が、活動を維持していくためには、皆の力を出し合っていくしかないというところが結論のように思います。そのためには率直に言えば金を出し合わねばならん、ということになるわけ、一人でも多くの方の協力をお願いしたいものです。

A そういう犠牲を払っても事務局を引き受けようなんてキョクな人は鶴和君くらいしかおらん。（笑い）

F エッ……

E 長期的展望にたつて事務局をどうするか考えないと鶴和君とどこにいつまでもお願いすることはかわいそうですよね。

A 同窓会会館みたいなものがつくれば一番いいんだろ

事務局長を拝命しました。

六本木司法書士合同事務所 41回生 鶴和 千秋



平成五年の忘れもしない四月十六日金曜日の夕暮れ時。打続く不景気の波に耐えかねて家賃の安い隣のビルへの事務所引越のさなか、しかも経費を抑えるため職員総出による手運び作業の真っ最中。移

出席者	
山本 高敬	25回
浅井 伴泰	30回
溝淵 真清	32回
窪田 秀忠	38回
鶴和 千秋	41回
吉井 雄二	49回

設したばかりの電話がまだ置きっぱなしの床の上でけたたましく鳴った。同期の関東支部事務局長岩村より「仕事が済み次第赤坂へ来い」とのお誘いコール。何となくいやな予感がしたので「今日は引越で手が放せない」と断ったが「他に待っている人もいるので必ず来るように」と念を押された。止むを得ず後を相棒で同期の横原に頼み、アタフタと毎度お馴染みの赤坂の土佐料理屋へ駆けつけた。

堀詰座に通い詰めて、人氣スターからお姫様女優、脇役の端々にまで通曉した今でいう『東映チャンバラおたく』の少年だった。映画ならここで中村錦之助が大川橋蔵扮する主人公が颯爽と現れて「娘さん、お怪我はござんせんか」と危機一髪のところを助け出しメデタシ、メデタシとなるところ。だが現実はそのなにごくはない。

近頃少し近藤先輩の健康がすぐれない。先輩と同学社のご好意に甘えて、いつまでも事務局のお世話をお願いし続けている。こういう事情はうすうす聞かされていた。少しずつ落ち着きを取り戻すにつれこの場の用件が何なのかぼんやりと分りかけてきた。この席でこの諸先輩から事務局移転の話が持ち出されたら、決して断り切れるものではない。同窓会からスッパリ身を退くか、事務局を引き受けるか二つに一つの道しかないことに気がついた。

「土佐高の同窓会が、年一回東京でもやりゆうと」けんど、年寄りばあで面白くないにかあらん。十数年前の自分にとつて、同窓会はその馴染みの薄い存在でしかなかった。そんな頃、偶然同じ町内の住人となった前出の岩村から同期の集まりに誘われ、ノコノコと出掛けていった。卒業以来の顔が懐かしくスツカリいい気分になっていたところへ「俺は関東支部の事務局長をやっている色々と忙しいき、同期の方はおまんが面倒見てくれんかよ」と持ち掛けられた。中学時代の生徒会長選挙で女生徒票をおさえて彼に恥をかかせた過去の負い目もあり「あんまり大したことは出来んけん」とそれでもエエかよ」とウツカリ引き受けてしまった。引き受けて少し彼の手助けをし始めて、これまで岩村がいかに変な思いをして関東支部を切り回してきたかを知るようになった。

「一体いつ仕事をしているのだらう?」「可愛いさかりの娘や息子それに美人で聡明な奥さんとの団欒のひと時はあるのだろうか?」「そんな心配をしたくなるほど事務局にかかりつきり、寝る暇も無いように見えた。しかし私にそんな同情心が生じるであろうことは、彼にとつては計算済みの織り込み済みであつたようだ。既にして私は、岩村の自家薬籠中の物となつてしまつていた。それから後は転がり落ちる石の如く。学年幹事から常任幹事、筆山編集部員から副幹事長。そしていよいよ会員三千人を束ねる土佐中・高同窓会関東支部事務局長へ。世のサラリーマンも羨むようなトントン拍子の出世、異数の累進である(もつとも雑用引受係の出世では……)。

土佐高の同窓会に関東支部が出来てどれほどの年月がすぎたのだらう。近藤先輩や北岡先輩が手弁当で若い学生の面倒を見ていた頃からだとすれば優に半世紀を越す歴史である。草創の頃の諸先輩から現在の役員を引き受けていただいては方々へ、更には次代を担ってくれる若い会員の人達まで。真綿でくるみ、頬ずりするような愛情で育んできた同窓会。それぞれの人がそれぞれの想いで係わりを持つ同窓会。

関東支部だより

事務局長 鶴和 千秋 41回
監査 吉井 雄二 49回
同 山本 高敬 25回
同 吉野 保徳 31回

●年会費納入状況 平成5年8月末現在、一〇四一名の方から納入頂きました。引き続き平成6年の会費を宜しくお願い致します。

東京5-166920
土佐中・高同窓会関東支部「お詫び」筆山16号同封の振替用紙が一部手違いで平成4

●学年幹事会 9月18日、ホテルエース高輪で開催。出席者40名。事務局移転問題と役員改選が行なわれ、辞任を申し出られた副幹事長の壺坂詭子(28回)さんに代わつて、佐々木さんが選ばれた。

新役員は次の通り。

支部長	宮地 貫一	21回
幹事長	溝淵 真清	32回
副幹事長	佐々木泰子	33回
同	窪田 秀忠	38回
同	岩村 康生	41回

年のものはいっておりまし
た。ご迷惑をおかけしました。

母校だより

学校長 森田 幸雄

冷夏と風台風による塩害で
痛めつけられていた校庭の木
々も、やつと恢復の兆しが見
えてまいりました。さて学事
の報告ですが、去る9月26日
には恒例の中高合同の大運動
会が盛大に開催されました。
いつもながら同窓生及び保護
者の方がたの熱烈なご声援に
は感謝の外ありません。次に
10月25日からは中学時代最大
の想い出となる修学旅行が、
九州一周の新旅程で実施され
ます。本校中三生にふさわし
い立派な成果を期待していま
す。また学期末にかけて、進
学校としての最重点課題であ
る現役合格率アップを目指す
高三生志望校検討会や、二者
乃至三者面談等々、真剣な最
終取り組みが続けられます。因
みに本年度の入試センターテ
スト出願者数は二九六名(91
%)でした。なお本年度の卒
業証書授与式は平成6年1月
29日(土)となっております。
また一学期に遡りますが中学
野球部が24年ぶりの県内制覇
を果たしたことも高校に劣ら

ぬ快挙でした。

本部だより

幹事長 岡内紀雄(34回)

●平成五年度総会が盛大に開
催されました。8月7日、三
翠園ホテルにおいて二五〇名
余の参加を得て、総会、記念
講演、懇親会が続いて開催さ
れ盛会裡に終了いたしました。
総会では会則が改正され、
「集う同胞はすべて同窓会の
会員となる」との広い視野に
立ち、中途退学者や転校者な
ど準会員の入会資格に係わる
条項を削除、会員資格の喪失
と回復に関する条項を新設し
たほか、組織の充実を図るた
め副会長と副幹事長を各一名
増員することになりました。
また役員の改選も行なわれ、
次の方々が新役員に選任され
ました。

会 長	町田 守正 16回
副会長	掛水 俊彦 24回
〃	山崎 和孝 26回
〃	池上 武雄 28回
〃	島中富美子 28回
〃	浅井 伴泰 30回
〃	岡内 紀雄 34回
幹事長	大久保浩二 32回
副幹事長	長野 和宏 34回
〃	横田 整二 40回
会 計	千頭 裕 58回

会計監査 大島 永弘 18回

〃 森木 将雄 32回

記念講演は羽方将之氏(38
回、カシオ計算機常務)によ
る『技術とライフスタイル』
というテーマで、OHPを駆
使した大変興味深いお話をし
ていただきました。

懇親会は森田校長、松浦前
校長を始め多数の先生方も出
席され、バスケットボール部
OB会のユーモアあふれる司
会進行のもと、よさこい鳴子
踊りも飛び出すなど、大変盛
り上がったものとなりました。
●平成六年度総会は8月6日
(土)新阪急ホテルにおいて開
催されることに決まりました。
多数のご参加をお待ちしてい
ます。

東海支部だより

幹事 南 毅一(37回)

●いつでも来れそうで来れな
い悲しい通過地の名古屋にも
同窓生は頑張っています。こ
の夏の懇親会は『ねぼけ』で
開催しました。土佐人にしか
分からない店名、まっこと美
味なるもの食おうと三十数名
集まりました。道ですれ違っ
ても分からない者同士ですが、
そこは同郷。一言二言で、お
まんが、おれが……。貴支部の

『筆山』や関西支部の『なん
ぶう』を通じて、各支部の状
況を確かめたり、席を替えて
他テーブルの美女参会者と懇
談したりの楽しいひとときで
した。この間、四年秋、五年
春の支部長杯ゴルフコンペの
優勝者、二神(32)池添(32)両
氏の表彰があったり、忘れか
けた応援歌の熱唱があったり
で打ち上げました。

●恒例の秋のゴルフ大会は名
古屋高知県人会との合同大会
で初めての試み。同窓生12名、
県人会12名の参加で、優勝は
中村高OBでした。残念、土
佐破れたり。

●新年総会は2月5日(土)で
す。多数のご参加を。

関西支部だより

事務局 竹原 暢子(28回)

●8月7日、本部総会に支部
長、事務局長出席。
●9月13日、『なんぶう11号』
編集会議。①母校、本部、各
支部に原稿依頼。②前号は約
二百通が返送されてきた。住
所変更届を徹底させる。
●来年度新年総会は1月22日
(土)、梅田の新阪急ホテルに
決定。多数のご参加を。
●会員数千三百名程の支部で
すが、常に幹事を引き受けて

くれる会員を探すのが悩みて
す。今後、どのように引き継
いでいくかが課題です。横の
つながり、縦のつながり、共
に同窓生としてのつながりが、
どんなに楽しく嬉しいもので
あるか、若い人達にも分かっ
て貰いたいと思うこの頃です。

広島支部だより

アジア競技大会開催が迫る
広島支部から……

事務局長 小島一洋(31回)



今、来年10月に迎え
ますアジア競技大会
の準備が着々と進展
し、広島は大きく名
実ともに変身中です。今まで
の開催地は全て首都でしたが、
第12回目に当たります次回
は、国際平和都市の広島開催です。
●7月にスナップ写真中心で
綴った支部会報『青春』No.4
を手作り発行致しました。

●8月28日、同窓生15名の出
席のもとに、第2回『夏の懇
親ピヤ・パーティ』を持ちま
した。本部総会出席報告や、
出席者の近況報告を交え、和
やかな懇親交流を深めました。
●新年総会・懇親会は1月下
旬か2月上旬の予定です。お
気軽にお出かけ下さい。

第44回 県中学野球選手権大会

24年ぶりの頂点

高校野球の余韻もさめやらぬ8月20日、母校土佐中学野球部は決勝戦で明徳を3-2で振り切り、8度目の栄冠を手にした。就任二年目の坂本監督は、準決勝までの5試合全てを零封してきた3人の主戦級投手陣と、全試合で失策2という鍛え抜かれた守備陣を擁し、「最後まで部員を信じて」この大会を制した。また登録メンバー20人のうち18名が三年生という選手層の厚さは、楠目新監督率いる高校野球部の前途に、洋々たる希望の光をもたらす事であろう。



坂本監督は、神奈川県出身で、昭和43年朝日新聞の『勉強と野球』と題して、翌44年受験、高校に編入。甲子園の経験はないが、龍尾先生の

早大卒業後13年間、神奈川県で教員を勤め、平成3年から再び母校に戻り社会科教諭、昨年春に中学野球部監督に就任された。

ご子弟を、愛する母校へ

坂本 隆 (47回生)

意を決して母校に戻って三年目。現在中学野球部を指導させていただいております。私自身、神奈川県出身で寮生活の有難さを感じながら育てていただいただけにご子弟を、愛する母校に入学させたいと念じておられる関東支部同窓の皆さんとは、とりわけ共通する思いがあるように思われます。

今春から、高知県高野連理事長の山本浩文先生が舎監となられた向陽寮では、中学生に毎晩2時間の指導学習が課せられ、学業、生活面でも充実した生活ができるシステム造りがなされています。現に、今夏選手権大会を制した部員のうち5名は、向陽寮で日々お世話になり勉学と野球に励んでいる、遠方からの入学生徒です。

野球に限らず、文武両道に挑戦しようという志高いご子弟を是非母校にお送り下さい。

足の裏から ③

カーニバルと

六尺禪

川崎製鉄フジイル支店長

38回生 戸田 博之

強烈なサンバのリズム。耳を聳る打楽器の音。色鮮やかな衣装。大規模な山車の上で褐色の肌を光らせ、殆ど裸に近い均整の取れた体をくねらせる美女群。各チーム五千人を超える集団が機軸席の前を次々に通り過ぎて行く時、見るものをして、一種原始の興奮に誘う。世界に名高いリオのカーニバル(謝肉祭)がもうすぐやって来る。

キリストの復活を祝う「復活祭」に先立つ四十日間を力トリックでは四旬節として、十字架にかけられたキリストを悼み断食が行なわれる。謝肉祭とは、この四旬節に先立つ四日間の祭りのことであり、断食の前に大いに羽目を外そうというのがそもその起りである。

いるため毎年その日が変わり、これにあわせてカーニバルの期間も毎年変わることになる。大体二月の下旬から三月の始めの頃になる。この期間中、リオの街は観光客と貧乏人、酔っぱらいと泥棒に占領されると言ったら少々オーバーか。十四のチームが次々に綱を競うメイン会場に見物に行こうとしたら、決死の覚悟。TシャツにGパン。時計等金目の物は一切身につけず、万一の時の金は靴の底に隠し、前後左右上下に目を光らせつつ、一目散に会場へ。

中へ入れれば一安心。腹の底の底まで響く打楽器のリズムに自然に体が動き、客席にて徹夜でサンバを踊ることになるが、腰から下は16ビート、首・腕から腰まで8ビートで顔が4ビート。これが同時にできますか？日本人にはまず無理。ブラジル人の天性のリズム感には脱帽あるのみ。

カーニバルの期間は、金持ちは色々なクラブで行なわれる仮装パーティで大騒ぎ。仮装していいと入場出来ないの、或日本人が六尺禪一丁の姿で出かけたなら、これがおおつけ。(筆者では絶対ありませんぞ) 禪姿でも仮装になるとは初めて知った。

二十年以上前には、こういうパーティに行く、必ずといっていいほど仮面を付けた妙齢のご夫人からカーニバルの期間は無礼講ですよ、今夜ご一緒しません？などと声が掛かったそうだが、ああ、古き良き時代よ、今いずこ。



筆者の住む(左から23mmのアパート) レブロン・イバネマ海

思い出の先生方 ⑪ 小松 博行 先生 (75才)

父・小松博行について

長男 小松 美裕 (48回生)

『三太郎の日記』の中に、「力においてダンテに似ずして、罪においてダンテに似るは余の悲哀である」という文章がありますが、父にとつての漱石は、阿部次郎におけるダンテのようなものであったのかも知れません。鵬外を持ち出すまでもなく、われわれにとつて脱帽する人は多くても、後ろについて行こうという人はなかなかいないものだと思いますのですが、父は明らかに漱石の後について行ったのです。

「漱石の生き方を一言で表わすと『守拙』ということになろう」と半藤一利氏が書いていますが、父もこの生き方を目指したものだと思えます。従つて、部分的に父を見ていますと、「生来の頑固者」とか「偏屈」とか形容したくなりますが、必ずしも全体を把握した見方とは言えないでしょう。

家庭における父は、近所の人とすぐ喧嘩をしたり、読まない本を矢鱈と買い込んで母

に叱られたり、寝る時に枕元へ数冊持つて来て睡眠薬代わりにしたりと、若い時分から苦沙弥先生そっくりでした。突然、訳もなく怒り出すことも時々あつて、何で怒っているのだらうと、子供心に不思議に思つたこともありましたが、それ以外は概ね優しい父親でした。自分が幼い頃、家庭的に恵まれなかつた所為か、家族は大事にした方だと思えます。特に、中学に入つた頃から殆ど叱られた記憶がなく、放任主義と言えるくらい自由にさせてもらいました。困つた時には、実によく面倒を見てくれましたが――。

教師としての父はよく知りません。自分でも倫理の授業を受けましたが、嫌で堪らなかつたことを覚えているだけで、特に印象に残っていることはありません。ただ、出来不出来の差が大きかつたような記憶があります。

若い時分、竹刀を持って校内を見廻つていたとか、悪童をよく殴つていたとか、断片

的に聞いたことがあります。「坊ちゃん」の正義感を気取つていたものではないかと思えます。ただ、そういう体罰教師的エピソードの割には、当時の生徒さん達との繋がりは強く、特に28回の女性の方々に、30回Kホームの方々には学校を退くまで（自分も含めて）大変お世話になつたことを思うと、あの連帯感は何なんだろうと考えずにはいられません。

これはまつたくの想像ですが、「父の価値観と当時の（社会の）価値観がたまたま一致した」というのが言い過ぎだとすれば、「少なくとも、社会が父固有の価値観を許容し包含できた、極めて稀で幸福な時代に、教師としての働き盛りの時期を過ごすことが出来たからなのではないか」という風には考えています。



昭和30年頃、筆者の遠足に付添った先生

そういう意味で、父は教師という天職を――松浦先生をはじめ、多くの先輩同僚に支えられながらも――概ね大過なく全うしたと言ふことが出来るでしょうし、本人にとつても、様々な葛藤にも拘らず満足すべきものであつたのではないかと思われるのです。おそらく、父の最大の心残り、我が愚息の教育に失敗したことではないでしょうか。

作曲・指揮 平井 康三郎 (5回生)

詩と音楽の会々長
音楽作家団体協議会理事

チェロ・作曲 平井 文一郎

カルザス高第・国連シンフォニー顧問

ピアノ・作曲 平井 文二郎

東京芸術大学教授・ジュリアード音楽芸術博士

三菱電機株式会社

相談役

進藤 貞和

(3回生)

〒100 東京都千代田区丸の内2丁目2番3号

湘南短期大学学長
神奈川歯科大学常務理事・教授

法学博士 門 脇 稔 (25回生)

自宅/神奈川県逗子市山の根2-6-3 ☎(0468)72-1213

三菱電機エンジニアリング株式会社

常任監査役 森 健
(23回生)

〒100 千代田区大手町2-6-2(日本ビル)
電話 03-3243-1781(代表)

ルイ・ヴィトン ジャパン株式会社

代表取締役社長 秦 郷次郎
(31回生)

〒107 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル
電話 (3478) 3694番



株式会社 くもん出版

代表取締役社長
中 城 正 堯 (30回生)

東京都千代田区富士見1-12-21 〒102
BR九段1
TEL (03) 3239-1427(直)
FAX (03) 3234-4018



切花の輸入販売
DE MASTER フラワースクール経営
切花鮮度保持剤の輸入販売

CLASSIC
株式会社クラシック

代表取締役 西 尾 義 彦 (33回生)
本 社 東京都渋谷区神宮前6-12-20
TEL 03-3797-4950
自 宅 東京都目黒区中町2-17-13

LAURA ASHLEY

松 岡 巖 (31回生)

代表取締役社長

ローラ アシュレイ ジャパン 株式会社
〒150 東京都渋谷区神宮前3-35-8 ハニービル青山
Tel.(03)5474-2642 Fax.(03)5474-2644

株式会社日本テクナート
(株)日本アステック (株)フェイス

代表取締役 小 島 三 郎 (40回生)

取締役営業部長 門 田 健 一 (43回生)

監 査 役 小 島 修 子 (43回生)

本部 〒168 杉並区和泉4-42-32
TEL 03(3313)7251 代表



近代都市計画株式会社

常務取締役 三宅 ヨシロウ (38回生)

業務内容○市街地再開発
土地有効利用計画、建築設計

東京支店
〒110 東京都台東区東上野4-6-7 広徳ビル204
TEL 03(3847)4371☎ FAX 03-3847-4373

有限会社 和 久
橋梁の計画・設計

小 松 三 男 (41回生)

〒236 横浜市金沢区釜利谷町1423-36
TEL 045-782-1008
FAX 045-782-9145



住まいの情報センター

ミツワ ホームサービス

代表取締役 中 屋 隆 彦 (41回生)

〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷2-13-1 平沼ビル・幡ヶ谷北口駅前
TEL(03)3320-0320 FAX(03)3378-7097

『らん』と『いごっそう』

日本一の切花輸入商社 (株)クラシック社長

西尾 義彦 (33回生)

10月2日土曜日午前6時、夜行便で成田に到着。いつもながらの泊二日のパンコック出張だった。今年のタイ産洋蘭の出来は不作の昨年に比べて30%の増産。品質も良い。秋の結婚シーズンに向け、大量の買付けが出来て満足。

目黒の自宅に飛び帰り、熱いシャワーと、妻が心を込めて焼いた目一杯黒こげの土佐のウルメでリフレッシュ。何年ウルメを焼いちゅうやろかがいに焦げちゅう。(残念ながら彼女は明石産)

午後2時にはオーブン直後の羽田から高知へ。高知空港ではこの日の招聘者、土佐生花市場の徳久社長(夫人は39回生・田辺靖子氏)の出迎えを受ける。飛行場の近辺は花の温室が林立している。高知は全国でも有数の花の一大産地なのだ。ユリやグロリオサは日本一の生産を誇る。

4時から高知の花屋、生産者、県関係者約二百名を前に世界の花マーケットの現状やわが国における花ビジネスの

動向について自説を開陳。こういう講演では辛口が受ける。我々輸入の切花があなた達生産者をツブしますよ。マーケティング戦略のない花生産や販売はツブれますよ。消費者指向のない花屋さんにはツブれますよと挑発する。日本のフラワービジネスは消費も生産も世界最大。最高の技術で最高の花を作っている。ただ、惜しむらくは消費者不在というべきで、花屋での高い花をみればそれが分かる。

講演の後、参加者と共に飲む土佐の地酒とかつおのタタキがめつぼう旨い。分厚く切った生のニンニクをポリポリ噛む歯ごたえにシビレル。東京では「クサイから止めてえ」とクサイならぬ愛妻のせいでトンと味わえぬ……

翌日曜日は、ホテルに大町南国市長の訪問を受け、南国市の花振興についての意見を求められる。高速道路インターが出来る立地を利用して洋

蘭観光センターを、地域住民参加型の第三セクターで作るべしと提言。それにつけても南国市には、北村病院の潔先生や尾木病院の幸八先生など、土佐高の同窓生はお医者さんが多いですよという話に親近感が出る。こういう時には土佐高のネットワークが有難い。帰路、帯屋町の京や呉服店に寄る。店主の浅井市郎君は幹事ゆえ同窓生の消息に詳しい。「東京に住んで30年近くなのに、オマンはホンマに高知弁がぬけんねや」「ほうよ、ぬけるのはヘヤ(ご)だけよ」と楽しい話。東京行き最終便で帰京。

閑話休題。

ひよんなことから脱サラして、輸入切花専門商社を設立して丸十五年。なんとかこの業界でNo.1の地位を占めるようになったのも、土佐人特有の「いごっそう」と「進取の気性」があるせいだと自負している。一九七七年、ある商社のシンガポール駐在員として滞在していた時に、たまたま『らん』に出会ったのが、私とフラワービジネスとの係わりであった。

当時、

シンガポールから欧州に洋蘭が数多く出ていたが、日本には皆無といつていい程、輸出されていなかった。調査してみると、市場では評判芳しからず、曰く「形が悪い」「色が悪い」「輸入の花などダメダメ、止めときなさい」。だが否定されればされるほど、いごっそう魂がムクムクと。マッチ箱のマイホームを売却して(株)クラシックを設立した。まさしく背水の陣である。その後、紆余曲折、時の運、人の運にも恵まれて現在に至っているが、根底にあるのは常に土佐人の進取の気性と気骨である。



花に囲まれ花を語る西尾氏 (高知にて)

久しぶりの高知行きは、あらためてこのことを私に感じさせ、土佐人であることを確認した。——それにつけても、二人の息子どもは異邦人だ。ましてや、愛妻においておや。土佐高が甲子園に出れそうだと騒いでも、「フーン」……

今こんなことをしています

⑫

お悔やみ申し上げます

41回 吉川(西岡)萬里子
平成5年10月9日御逝去

故岩谷氏を偲ぶ会

昨年10月6日に急逝された、故岩谷清水氏(27回生)の一周忌を迎え、土佐高有志による偲ぶ会が、10月19日に新宿『酔鯨亭』で催された。

この日集まったのは、宮地支部長、溝渕幹事長をはじめ同窓会の役員、27回の同期生、新聞部OB、公文教育研究会の後輩など、約三十名。北岡筆山会会長の発声で献杯をしたあと、故人の同窓会活動でのリーダーぶりや、後輩の面倒見の良さから、底なしの飲みっぷりまで、思い出話の花を咲かせた。

公文教育研究会から刊行されたばかりの遺稿・追悼文集『野の花 空の鳥』も配られ、同会の国沢建紀常務(36回生)によって、東京公文開設時から海外進出までの故人の活躍ぶりが述べられた。同級生の岡林幹雄氏からは「熊さん(故人の愛称)、天国はどうぞよ。早速、同窓会支部をつくったり、向陽新聞冥界版を発行したり、天国公文を開いたり、

忙しゅうやりゅうろう。あんまり無理せんと、また落語でも楽しみや。それにしても、そっちへ行くのがちと早すぎたのう」と、ユーモアたっぷりのなかにも愛惜のこもったスピーチなどもあり、夜が更けるまで故人の徳を偲んだ。

30回 中城 正堯

同 期 会

●前回は鏡川で花火を打ち上げた42回生はどうも水辺が好きである。「いっつも土佐料理じゃ芸が無い。隅田川に屋形舟を浮かべ、綺麗どころを」と目論んだまでは良かったが、百人乗りの舟に出席の返事はたった30人。柳橋どころか、出航が危ぶまれる事態。欠席の理由——ボランテア、女房殿に代わっての子守、これは偉い。仕事、出張、単身赴任中、男はつらいねえ。ゴルフ、演奏会の練習日、まあ許そう。許せないのは「15年間連れ添った女房と別れ、愛人とその子供と暮らしています」ひとりだけ好い目を見て!

霜月13日、舟はなんとか漕ぎ出た。遠くは新潟、宇都宮から駆けつけた御人もいて、早速あちこちで旧交を暖める杯が飛び交う。レインボウ・

ブリッジのイルミネーションが小雨に煙る海上にくっきりと浮かび上がり、遠くにウオーターフロントの高層ビルが明りが霞んで見える。柳橋衆はいなくても、42回は土佐高史に残る好い女の多い年。いつの間にか、座も乱れ、注しつ注されつ、想いつつ、胸の高鳴り呼び起こし、「やけぼつくい」に火がついた。

42回 藤宗 俊一



原稿募集のお願い

『風の便り』このところ、めつきり投稿が少なくなりました。近況報告、同期会、催し物、花嫁花婿募集、捜し物、……葉書一枚程度で。

『思い出の先生方』生死を問わず、書き手を問わず。原稿用紙3〜4枚程度。

『今こんなことを』自薦、他薦共。原稿用紙4枚程度。

出版リーダー

●36回 大橋一章
『奈良大和路』

保育社・定価七〇〇円

●29回 竹内靖雄
『迷信の見えざる手』

講談社・定価一八〇〇円

●51回 阿部知暁
『ゴリラを訪ねて三千里』

理論社・定価一三〇〇円

ゴリラの魅力に取りつかれ、国内にいる五十頭すべてを訪ね歩いた画家のエッセー集。果ては英国の動物園やアフリカのジャングルまで行き、出あった個性的なゴリラたち一頭一頭を、銅版画に描いた。その巨体からは想像できない、はにかみ屋で頑固で心優しいゴリラたちの姿が、ほのぼのと浮かび上がる。(朝日新聞書評より)

筆山会だより

第25回 筆山会ゴルフ(10・21)

レインボー・C・C・

優勝 溝渕真清(32) 92 22 70

2位 岡田四郎(38) 94 17 77

3位 千原 宏(30) 99 21 78

B G 小松建紀(33) 89 8 81

④宮川(33)⑤澤村(33)―北岡

(5)中尾(9)寺川(12)久保内、

宮地(20)近澤(26)福本(28)

すきま風

浅井(30)吉野(31)竹田(33)八井田(34)永野、窪田、高田谷(38)大和田(39)小松(41)尚、次回は来年五月の予定。参加希望者は宮川まで。

●一言居士のK氏、筆山会ゴルフでの表彰式。では、10位のKさんに一言「えー、私は獣医ではなく、産婦人科の医者でして」と、まず座を盛り上げた。「最後にブービー・メーカーのOさんに……」に、間髪いれず「違うぞ、B Mはベスト・マダムと言わんといかんちゃ。おまんらあ、土佐高でどんな英語の勉強してきちゅうぞね」の一言。棒球の世代のこのフェミニストぶり、少しはみならわんと……。

そのK氏、この度、文芸春秋の投稿欄に徹文が掲載されたという。是非読まなくちゃ。●すっかり定着した『安くて便利な宅急便』。ところが、絵画となると大変。専門業者に頼むしかない。籠尾先生へのプレゼントに送ろうとしたら、ン万円の見積が来た。有志から集めた浄財はすっかり使い道が決まり、そんな予算などない。困りはてた某氏は、こともあろうに某議員事務所

に電話。「近いうちに高知行の便があるでしょう」と、快く引き受けてくれた。後で聞くと、某議員自ら機内に大きな荷物を持ち込み、空港から直接タクシーで先生の家まで届けてくれたという。『ちよつと』

●夜風も冷たくなった10月の下旬、支部長の呼び出しがあり、美女の誕生日を祝って『マルゴの82年』を抜くとの事。前回はマサコ鯛のおかげで、ムートン・ロトシールトにありつけ『今まで生きてきた中で最高の幸せ』を感じさせて頂いた者としては、その上に美女もいるとなると、喜び勇んで駆けつけた。

フランスパンにキャビア、各種のチーズ、ローストビーフ、ベーコン巻串焼き……。これでワインがすすまない訳がない。三時間前に眠りからさまたれた命の水は小踊りしながら鼻喉を駆け抜けた。

気持ちよければ、言葉もはずむ。いつの間にか、お世話になっている富士メガネの品評会に。幹事長の眼鏡を取り上げて「このセルロイド……」と言いだしたのは、アルミのキャップとセルロイドの下敷の世代からふた回り以上離れ

た同伴の美女。一瞬、誰も言葉がでない。間を置いて爆笑の渦。目に涙をためて大笑い。富士メガネでは昔懐かしい二十万円のセルロイドの眼鏡を置いてあるそうです。

最後に、誕生日を迎えた彼女から、出席者全員に叶え箸のプレゼント。隣の新事務局長が、包装の筒を覗きこみながら怪訝な顔。筒の中は空。

「どこに箸が……」とボツリ。又しても、沈黙の後の大爆笑。「今年はいい籤ばかり当てるのう」と、なぐさめられる。

宴の後、シャトーものの空瓶が七本もゴロゴロ。思わず「レストランだったら……」と『Sitting at the Master』に聞いたら、「うちでは、そんなもの置いてません」と、キツパリ答えてくれた。

編集後記

■「百才まで生きる」とがんばっていた父が逝った。九十才の夏だった。こよなく酒を愛し、人を愛し、オビヤ町を愛していた。

父の部屋から筆山がよく見える。ヨサコイ祭りの前夜祭。「ドーン」と打ち上げ花火が鏡川と筆山から夜空に咲いた。「ホラ見て見て」に「よう見

える」と一緒にながめた。祭りが終わり、やがていのちの火も消えた。「お父ちゃんねえ、もうおらんなるき、みんなあ仲良うしなさいや」と言い遺して……。

いくつになっても父は「お父ちゃん……」 (佐)

■事務局移転にともない、これでやっと晴れて自由の身になれると思っていたら、なかなか足を洗わせてくれないのが、同窓会という恐い組織らしい。新事務局長の鶴和君には、中学時代の恥部まで暴露されるし、東映映画の話までもちだしての涙ぐましい就任の弁には、笑いころげながらも、友人として「ご苦労さん」と言わねばならん。がんばれ、がんばれとエールをおくろう。フフフ…… (岩)

■しばらく休載していましたが『思い出の先生方』に、あの『サカイ族』が登場。スネの古傷が竹刀の思い出とともに再び……。実は「まだ、死んぢやあせん」と固辞されておられたのを、無理矢理お頼みして、先鞭をつけて頂きました。これから、お元気な懐かしい先生方に次々と登場して頂く予定です。請う御期待下さい。

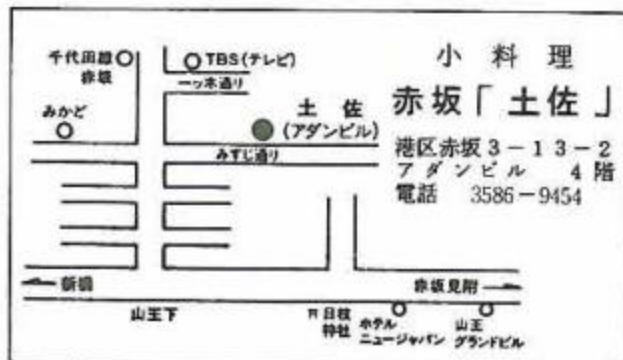
(藤)



くじら刺 1000円
くじらたたき 2000円
かつおたたき 780円

新宿区歌舞伎町2-41-7 川井ビル
TEL 03(3209)0145
姉妹店「アリス」TEL 03(3200)1576

土佐へ来てみいや



都会の中の小さな土佐



〒104東京都中央区銀座7-6-8(西五番街) ☎572-9640

- 赤坂店(赤坂みすじ通り) ☎3585-9640
- 新宿店(新宿住友三角ビル) ☎3344-6585
- 渋谷店(シオノギ渋谷ビル) ☎3407-9640
- 勝鯉亭(新宿野村ビル) ☎3348-2727
- 加寿鶴(新宿住友三角ビル) ☎3345-0881



季節のふるさとの味

土佐酒蔵

銀座7-12-4 サンリード地階
☎3545-3855 銀座第一ホテル通り